

# 琉球大学学術リポジトリ

国際フォーラム「人の移動と21世紀のグローバル社会」  
ー海外日系紙記者のみた移民社会ー

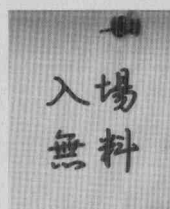
メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 町田, 宗博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002010113">https://doi.org/10.24564/0002010113</a>

国際フォーラム

# 「人の移動と21世紀のグローバル社会」

—海外日系紙記者のみた移民社会—

## 要旨集



開催日時：2011年10月14日（金）16時 - 19時（15:30開場）

会場：パレット市民劇場（那覇市パレットくもじ9階）

主催：琉球大学「人の移動と21世紀のグローバル社会」  
プロジェクト移民研究班

## このフォーラムの開催にあたって

移民研究班チームリーダー 町田宗博

琉球大学のプロジェクト「人の移動と21世紀のグローバル社会」移民研究班では、海外で活躍する日系紙の方々をお招きしフォーラムを開催することにした。メインタイトルはプロジェクト名とし、「日系紙記者のみた移民社会」というサブタイトルを付した。開催の趣旨は、日常的に日系人コミュニティに向き合っている海外日系紙記者の方々に、海外における日系コミュニティあるいは沖縄系コミュニティの現状等を報告の後、フロアの参加者を含め、今後の沖縄および日本と海外日系・沖縄系コミュニティのつながりについて、現地社会の状況とグローバル社会をキーワードに討論をすることである。

周知のとおり、新聞記者は、事件・事故や新年会・祝賀会のお祝い事まで、換言すれば世の中の影の部分から光の部分まで守備範囲にいられており、常に社会の最前線に立ち活躍しておられる。おそらく、研究者とは違う切り口や視点、その豊富な経験にもとづく知識で、日系・沖縄系コミュニティや現地社会に対する知見を語ってもらえるであろう。これらのが、我々移民研究班がこのフォーラムを主催する意図である。

マスコミ関係者の言うには、海外の日系紙記者によるこのような試みは聞いたことがないという。おそらく日本でも、初の試みであろうと言う。このようなこともあり、あえて第1部には研究者を加えず、マスコミ関係者のみの構成とした。

今回のフォーラムにあたり、招鳴の新聞社をここ数年の我々移民研究班の調査に関連した方々とさせていただいた。特に北米の関係者の方々にはこの点ご了承をいただきたい。また今回、予算と時間的な制約もあり、ペルーの関係者をお呼びすることが出来なかった。この点、我々も心残りであり、次の機会に繋がらせていただければ幸いである。

今回、ブラジルから2名、アルゼンチン、ハワイからそれぞれ1名の方に来ていただいた。次のような方々である。「ニッケイ新聞」(ブラジル)の深沢正雪氏は静岡県生まれで、1992年にブラジルに初渡航、潮ノンフィクション賞も受賞している。「ウチナープレス」(ブラジル)のヴァネッサ城間知念氏は、ポルトガル語によるウチナーンチュ社会のコミュニティ紙を発行する四世である。ウチナーンチュの行事のあるところではどこでもヴァネッサ氏の顔がある。「らぷらた報知」の崎原朝一氏は1934年生まれで、沖縄からの学童疎開、アルゼンチンでのクリーニング店経営、日本への出稼ぎの経験を持つ。アルゼンチン日本人移民史編集長、沖縄県人移民百年史編纂委員会日本語部門担当でもある。仲嶺和男氏は1939年生まれ。1964年から5年間琉球新報の記者を務めたのち渡米、ハワイタイムズ記者をへて1977年にハワイパシフィックプレスを創刊した。司会の前原信一氏は1973年に沖縄テレビに入社、1978年から「沖縄発われら地球人」「世界ウチナーンチュ紀行」のディ

レクターとして 210 本の番組を制作した。2001 年には、日本民間放送連盟賞活動部門優秀賞を受賞している。

今回のこのフォーラムが沖縄県の主催する「第 5 回世界のウチナーンチュ大会」の開催期間中に開かれることもあり、このフォーラムでの知見を含めた経験が、新たな移民研究の糧となれば、主催者の望外の喜びである。

## 第 1 部 報告会

報告者① 仲嶺 和男 (ハワイパシフィックプレス)

タイトル「ハワイの日系人」

### 要旨

#### 1. 日本人移民のあらまし

米国大統領の出身地ハワイには、バラク・オバマさんが生まれるずっと前から日本人が住んでおります。古く遡れば沖縄とも縁のある中浜万次郎（ジョン万次郎）のように短期間滞在した者も多数いました。定住するようになったのは、1868 年の集団移民からです。明治元年の年なので“元年者”とよばれていますが、実は一行が日本を発ったのは明治政府がスタートする 4ヶ月前の徳川幕府時代です。149 人が 3 年契約でサトウキビ耕地で働き、自由の身になった後は米本土に渡った者、日本に帰った者があり、ハワイに残ったのはわずか 25 人でした。ハワイ日系人の草分けとなりました。

その後、明治政府とハワイ政府との協定によって 1885 年から移民が本格化し、日本人移民が禁止される 1924 年までに約 20 万人がハワイの土を踏みました。最初の 10 年に移民の半分は帰国しましたが、2 世の誕生が増えて、太平洋戦争が勃発した頃にはハワイ全人口の 44%、約半分を占めるまでになっていました。

戦後、また日本からの移民が再開しました。まず、日本占領軍将兵（多くは日系人）と結婚した「軍人花嫁」が大挙してハワイに渡りました。その数は 7 千人とも 1 万人とも言われます。近年は毎年行われる抽選永住権による移住があります。米国は年間約 15 万人ほど移民を受け入れています。希望者が多いので、抽選によって選ばれます。国ごとに枠が決められてあり、日本人は約 2 千人です。

また、アメリカ人と結婚して移住する人も多いです。日本駐留軍人との結婚、外務省のジェットプログラム (Japan Exchange and Teaching Program) に参加して日本滞在中に親しくなった者との結婚、あるいは留学中に知り合った者、ハワイ旅行中に知り合った者との結婚など様々。結婚相手は日本人の場合女性が圧倒的に多いです。どうやら日本男性は米国の女性から結婚相手としては嫌われているようです。更に最近では、ビザなしで 90

日間滞在出来るようになったことから、引退者の中にはこの制度を活用して長期間滞在する人が増えています。

現在、在ホノルル日本国総領事館に届け出のあった日本人数は約1万7千人です。この中にはもちろん米国に帰化した人は入っていません。遺産相続などで非米国人ですと不利になることが多いので、米国に帰化する日本人が最近増加しています。

ところで、ハワイの全人口に占める日系人・日本人の割合は28%に低下しています。他の州から移り住む人が増えたほか、フィリピン人、韓国人の移民の増加などが原因です。全体に占める割合は小さくなったとはいえ、未だハワイの人口のおよそ3人に1人は日系人・日本人という状況は続いていますので、ハワイにおける日系人・日本人は少数民族ではなく多数民族ということになります。

## 2. 日本の縮図

移民に続いてハワイに渡って来たのは、僧侶です。本格的に移民が始まってから4年目の1889年には浄土宗本願寺派のお坊さんがハワイに足を踏み入れています。そのとき移民はすでに1万人以上に増えていました。他の宗派の僧侶も続々とやってきて、お寺を建てました。キリスト教、少し遅れますが新興宗教も。おそらく全ての日本の宗教がハワイにきています。戦後は特に新興宗教の活躍が目立っています。

お寺と教会は移民のたまり場となり、次第に日本人社会が形成されるようになりました。2世の誕生が増え、お寺と教会は日本語学校を設立して彼らの教育にも力を入れていきます。そして、その日本人を対象にした商業が誕生しました。新聞社を始め洗濯屋、下宿屋、雑貨店などが次々に誕生、各地に“日本人村”が出来ました。

そして、同郷人が集まって県人会や郷友会などの親睦団体も次々に生まれました。日本人病院や日本人商工会議所といった全日本人を対象にした団体が創立されました。宗教のほか舞踊、音楽、武道、書道、茶道、華道、詩吟など各種の日本伝統文化が定着し、文字通り日本の縮図とも言える社会がハワイに生まれ、現在も生き続けています。移民一世が健在だったころはよく「日本国ハワイ県」という言葉が聞かれました。

近年はコンピュータの発達により、日本と同時にテレビが見られ、新聞が読めるようになりました。また、「在外選挙」が実施され、国会議員選挙にも参加出来るようになり、日本人にとってハワイでの生活が益々快適になってきました。

## 3. ウチナー社会

このようにハワイにおける多数民族である日系人の社会にあって、ウチナーンチュは独特の存在感があります。琉球音楽や琉球舞踊といった沖縄芸能がことのほか盛んで、ハワイ大学には正規の講座があり毎年多数の学生が受講しています。種々の催しやパーティー

などの余興にはフラ踊りとならんでよく“オキナワン・ダンス”が登場します。沖縄関係の催しなら沖縄音楽と舞踊一色になります。

個人的な生活でもかなりウチナーンチュにこだわった生き方をしている人が多いです。その象徴的なものが郷友会の存在でしょう。ハワイ沖縄連合会（県人会）にはなんと49郷友会や団体が加盟しています。他県の場合は広島、山口、福島などに郡人会が数団体あるだけで、県人会だけです。郷友会は市町村単位ですが、中には小祿字人会なるものもあります。各郷友会は3世の時代になった今でも毎年新年会と夏にピクニックを行って親睦を深めている他、葬式など不幸なことが起こった場合は皆で助け合っています。

強力な文化・親睦団体もあり、沖縄系2世や3世が中心になって運営しています。フイマカアラは毎年千人近い出席者を集めて奨学金募集の為のファッションショーを開きます。フイオラウリマ婦人会は沖縄文化の継承発展のために支援金を提供するなど素晴らしい功績があります。ラナキラ沖縄年長者クラブも日本人老人クラブとは独立した活発な老人クラブ。20年前にはハワイ沖縄センターがハワイ日本文化センターに先立ち完成しました。芸能関係は20以上の団体があります。

ヒニのように草の根的に広がったウチナーンチュのパワーが大きく花開いたのが、日本の勤労感謝の日当たるレーバーデー(9月の第1月曜日)前の週末に開く、沖縄フェスティバルです。今年で29回目。ワイキキのはずれにあるカピオラニ公園で土日の2日間にわたって開催、終日沖縄芸能が披露され、5万人以上の来客で賑わいます。このフェスティバルには沖縄の皆さんも大変関心をもたれ、毎年多くの人達が参加し、催しに華を添えています。

さて、ハワイのウチナーンチュは3世の時代になってもどうして、このように熱狂的に沖縄文化を愛しているのでしょうか。皆さんの関心事ですね。その原因を少々述べておきます。

戦前までのウチナーンチュは、日本人社会の片隅で小さくなって肩を寄せ合っていましたので、沖縄芸能が大手を振って日本人社会に登場することはありませんでした。趣味の域を出ず慰め草的存在でしかありませんでした。それが太平洋戦争終結とともに火山が爆発したかのように盛んになったのです。

その理由は、敗戦により沖縄が日本から切り離されて、独立国的存在になったこと。それに、沖縄戦における日本軍による沖縄県民への暴虐に対する同情心が相俟って愛郷心が高まったことです。その発露として戦争で灰燼に帰した沖縄の救済運動が起こり、運動の一環として沖縄芸能の発表会が頻繁に開かれるようになりました。要するに沖縄芸能は、高まった愛郷心の拠り所、ウチナーンチュの心を一つにするシンボル、国旗に代わる“依り代”的存在になったのです。今はやりの言葉だとアイデンティティということになりま



す。

27年間に亘る米軍統治は、世界の人々に沖縄は日本とは別の独立国だ、と言う印象を植え付けたようです。一般のハワイの人の中にも、未だにそのような観念を持っている人がかなりいるように思います。

しかし、ハワイのウチナーンチュは、日系人としての誇りを持ち続けており、日系社会の活動にも率先して参加しています。日系社会の上部組織であります日系人連合協会には沖縄連合会もちゃんと加盟し、会長が7人誕生しています。また、日系人最大の催しであります桜祭りを主催する日系青年会議所には多数の沖縄系が活躍していますし、桜の女王になった沖縄系はすでに8人にのぼります。

#### 4. ヤマトウーとウチナー

さて、ハワイにおいてもウチナーンチュとヤマトウー（他県人）はうまくいっていない面があることを見逃す訳には行けません。そのコンフリクト（不和）を「文化の違い」と簡単にかたづけられる人が多いですが、それは間違いです。私は倫理観の違いが原因だと思っています。

微妙な問題なので、例をあげて説明したいと思います。1年程前、日本語放送局の番組放送中にリスナーから〇〇レストランの電話番号を教えて欲しいと、電話が入りました。アナウンサーはすかさず「そのレストランはスポンサーではないので教えることは出来ません。会社の規則です」と拒否しましたが、4、5秒後「会社の規則を知らなかったことにして教えます」と言って、教えました。

皆さんは、このアナウンサーについてどう思いますか。私はミニアンケートを行いました。4人ずつ、3秒以内に直感で答えてもらいました。その結果、ウチナーンチュは4人のうち3人が「嘘つき」と答えました。残る一人は「このアナウンサーはおかしい」というので、何がおかしいのか尋ねたら「いったん会社の規則と言って断りながら、規則を知らなかったことにしたことです」と。私はこんな人を嘘つきと思うので、ウチナーンチュは全員「嘘つき」にしました。ところが、ヤマトウーの場合は、2人は「心が優しい人」と答えたのです。他の1人は嘘つき、もう1人はノーコメントでした。

驚きました。ウチナーンチュ全員が嘘つきだと思っている人が、ヤマトウーにとっては心が優しい人になるのです。

こんな話もあります。レストランではウェイトレスは2人1組のチームを作って給仕をしますが、沖縄出身者はヤマトウーと組むより他人種ローカルと組んだ方が楽しく仕事ができるという人が多いです。ヤマトウーよりはローカルの方がフィーリングが合い、一緒に仕事をしていてカムフォーターブルだと言うのです。

私は日本人と日系人の違いに大変関心を持っています。これまでにインタビューした4

人の意見をかいつまんでまとめますと、「日本人はパブリックでは、人前では大変紳士的で礼儀正しく好感が持てますが、個人的に付き合っているとごまかし、嘘をつくのが上手な人が多いです」ということです。

## 5. 日系人・ウチナーンチュの将来

日系人・ウチナーンチュのハワイにおけるパワーは、現在をピークに次第に縮小していくでしょう。経済界ではすでに始まっています。(アメリカ)本土の大企業の波が押し寄せてきて、移民1世らが築いたスーパーや商店が次々と閉鎖に追い込まれています。盛業中の企業でも、時代の波に打ち勝つ為には、本土の投資家に顔が利く人に頼らなくてはならなくなり、トップの人事も本土に求めざるをえなくなりつつあります。

ハワイ大学総長人事なども同様の状況にあります。何よりもマスメディアに登場する日系人が次第に減少しつつありますし、大企業の役員の中に日系人の名前が少なくなるなど各面にグローバル化の影響がおよびつつあります。

特にウチナーンチュ社会の場合は顕著です。経済面では15年程前にハワイだったタイムススーパーマーケットが、米本土のスーパーに買収されたほか、大型のレストランや企業が倒産するなど、ハワイの経済界におけるウチナーンチュのパワーは半減しつつあります。

グローバル化は今後益々強まることが確実であり、ウチナーンチュの将来を考えるにあたって、現在の生き方を考え直す必要があると思います。ここ沖縄県を含めてウチナーンチュはあまりにも利根的な物に関心を持ちすぎると思います。これではグローバル化の波に呑まれて、衰退への一途をたどるだけではないでしょうか。

## 6. 結び

これまでに述べてきましたように、ハワイには日本の縮図ともいえるコミュニティがあり、日本各地から集まった日本人が大勢住んでいます。そのなかでウチナーンチュが一番輝いて見えるのは、正直な人が大変多いということです。「正直」はウチナーンチュの宝だと思います。グローバル化が進む中でウチナーンチュが大事にしなくてはならないのは、この「正直」ではないでしょうか。

世界のどの宗教も国も、嘘はついてはならないと教えています。つまり「正直」は、全人類の“大義”だと思います。私はこれからのウチナーンチュの団結のシンボル、生き甲斐は「正直」に求めるべきだと思います。それが実現したとき、ウチナーンチュはきっと世界遺産に登録されることになるでしょう。



報告者② 崎原 朝一（ラプラタ報知）

タイトル 「アルゼンチンの日系社会・沖縄人社会」

## 要旨

### アルゼンチン日系社会の特徴

アルゼンチン日系社会の特徴は、個人の自由渡航という形で始まり、また戦前、戦後を通じて、ときどきやってくる洪水期のように、隣国ブラジル、ペルー、パラグアイ、ボリビアからの転住という形の新陳代謝があった。こうして日本人社会の基礎が築かれた。

沖縄系社会の特徴は、現在、日系社会の70%を占め、市町村人会組織がベースになり、その集合体が沖縄県人連合会である。ペルーやブラジルの場合、いずれも植民地入植の集団農業移住だった。しかし、アルゼンチンでは、国の移住政策はヨーロッパ系移民中心で、アジア系の集団移民は認められず、個人あるいは呼寄せという形でしか入国は認可されてなかった。

### 初期移民

画期的な動きとして、1908年から、アルゼンチンのほうが働いてカネになるという理由で、笠戸丸組移民でブラジルの耕地生活に不満を持った移民たちの転住が増加した。転住者の中に知念政実（首里出身）、仲里新忠（今帰仁出身）がいて、この2人がアルゼンチンにおける最初の沖縄人移民になった。

### 独立、団体の組織

異郷での生活が始まり、言葉、生活習慣の勝手、仕事の要領が分かってくる中で独立し、あるいは、仲間同士の共営でカフェ店、クリーニング店、野菜や花卉の栽培に移っていった。

1917年、沖縄県人会が誕生した。1918年の時点で、在留邦人数のトップ3は鹿児島県人の239名、沖縄県人の157名、熊本県人の66名だった。ところが、1916年に誕生した在亜日本人会だったが、統一性を欠き、1921年、公使館の要望で既成有力団体の鹿児島県人会、沖縄県人会、日本人労働組合を解消して日本人会に合流、会員800名を超える総合団体になった。1929年、基金募集をして会館を完成させ、各地にも支部、日本語学校が出来ていった。

アルゼンチンで新しい町、村が誕生するとき、教会を中心に町が広がるが、日本人社会の場合、子弟のための日本語教育が柱になった。

### 沖縄海外協会支部結成と皇国民教育

1931年、沖縄海外協会支部が結成される。その初期は、会員親睦のピクニック、角力大会、タンゴ楽団伴奏付きのダンスなど、まだ牧歌的なところがあった。やがて、祖国日本の軍

国主義化，皇国民教育の方向が打ち出されると積極的にそれを受け入れ，子弟を日本教育へ送り出すケースが増えた。

#### 日本の敗戦

勝つと信じていた第二次大戦だった。邦字新聞の発行禁止で情報は閉ざされる中，人心の混乱は招いたが，現地スペイン語紙を通して，日本が負けた状況は捉えることが出来た。ただ，罹災した祖国日本の情勢は分からず，とくに戦場となり，占領された郷里を持つ沖縄県人は帰る場所を失い，家族の消息も閉ざされ，絶望の淵に追いやられていた。

やがて，邦字新聞が復活し，個人的に手紙が届くようになると，状況が次第に浮かび上がってきた。沖縄県人有志は自らの報道機関を求め，株組織の新聞社を立ち上げた。永住の気持が広がっていた。

#### 沖縄の伝統芸能

沖縄県人移民は荷物に三線を潜ませて外国に出たが，伝統音楽，舞踊は脈々と異国の生活の中で生きていた。日系社会の復興，あるいは，戦災日本義援金募集のための演芸会の中心となる大きな役割を果たした。さらに 世代交代がすすむ中，高齢者をいたわる敬老会，生年・トーカチ・カジマヤー合同祝いなど伝統的‘慣習の継承につながった。

#### 移住再開

戦後日本の外国移住は，先鞭をつける形でアルゼンチンから始まった。とくに沖縄出身者の呼寄せには拍車がかかり，結果的に 70% を占めることにつながった。しかも，過酷な戦場・占領を体験した戦後の移住者たちは，もう，マイナーな沖縄人ではなかった。

#### 移民百年祭紛争・沖連紛争

移民百周年の歴史的な意義は大きい。しかし，日系移民百周年紛争というものが起こり，日系社会を混乱，分裂させてしこりを残した。武道館建設，日本庭園，茶亭，日本病院，日本人移民史編纂を五大事業とする計画があったにも拘らず，拒絶反応を引き起こして二派が対立，日本庭園と茶亭だけを完成させた。企画・実行能力を持つリーダーの人柄，独走性が召集力を半減させたものだった。

並行して沖連紛争があり，二つは微妙に絡み合って進行した。これも派閥争いを内包し，それぞれのリーダーの後に控える市町村団体を巻き込み，沖縄系一世社会を二分し，しこりを残した。しかし，その後の新会館建設運動，会館完成，活動の活性化は大きなプラスとなる効果を生んでいった。

#### 沖縄移民の 100 年

出稼ぎ現象は日系社会に空洞化というマイナス部分を招いたが，沖縄県費留学・市町村

費研修などと組み合わせたり、日本、あるいは、沖縄を体験する機会を増やした。日本・沖縄との人的交流、理解をより具体的なもの、幅広いものにして、アイデンティティー造成に手を貸している。こうした伸展の流れを作りながら、沖縄移民の100年を2008年に印した。さらに、空手、太鼓、文化講座などを仲介にした活動、アルゼンチン社会との一体化、交流がすすみ、沖縄系社会は日系社会の一員として、ステータス向上への貢献度は高い。

報告者③ 深沢 正雪（ニッケイ新聞編集長）

タイトル 「ブラジル日系社会の百年の推移と沖縄系の果たした役割」

要旨

ブラジル日本移民は1908年に開始しますが、実は団塊世代を形成しています。1926年から1935年までの10年間に、戦前戦後を通じた全移民25万人の過半数である13万2千人が集中して渡航しており、私は「ブラジル移民の団塊世代」と呼んでいます。

評論家の大宅壮一は「明治大正時代が見なければブラジルに観光旅行するがよい」という名言を残しました。なぜ、「明治の日本」がブラジル日系社会に残っているかといえば、「移民の団塊世代」の気質が「明治の日本」そのものだからです。団塊世代は当時30歳前後の家長に率いられていました。家長は日露戦争前後に人格形成した世代であり、それが子供、孫に受け継がれて、のちのブラジル移民史に大きな影響を与えたわけです。

戦前移住は、鉄道の駅が延びていくのと深い関係があり、まるで年輪のように区切られており、私は「年輪入植」と呼んでいます。開通されたばかりの駅の少し先、未開拓の安い土地へと入っていったからです。だから勝ち負け抗争のとき、テロ事件関係者がパウリスタ延長線のマリリア駅からオズワルド・クルス駅までの区間に集中しているのは、1930年代前半に次々に駅が完成したこの区間に集中的に入植したからだと思います。

沖縄系移民も実は独自に団塊世代を形成しています。特徴的なのは1917年と1918年で、この2年間だけで4,342人も入っています。1918年現在の日本移民総数の実に17%を占めます。つまり、一般の日本移民よりも早い段階で「団塊世代」を形成し、その後に入国ピークを迎える日系社会全体の先導役、水先案内人の役割を果たしてきたと私はみています。

移民の精神には常に「二つの方向の民族性」が強く働き、それが時代の情勢によって揺れ動きます。一つは「祖国向き」、もう一つは「移住先向き」です。一般的に、早く来た人の中でその土地の人間と競って何かを成し遂げられるレベルになった人は、その土地のことを良く理解しています。そして同化傾向を強め、子供にその土地でもっと成功してもらうために高学歴を与えようとしています。

ですから、1926年に全県人会に先駆けて本格的な県人組織を整えた「球陽（きゅうよう）

会」(沖縄県人会の前進)の存在は非常に大きい。初代会長になった翁長助成(おながすけなり)は早い段階から永住志向を持ち、長男・英雄に対して「ブラジル人となれ」と教育し、戦前にサンパウロ総合大学(USP)法学部を卒業させ、日系初の二世ジャーナリストにしました。戦後、勝ち負け抗争が起きて日本移民への一般社会の評価が最も下がった時、日本移民の地位と権利を守るべく先頭に立ち、一般社会への切り込み隊長として戦ったのは、最も虐げられていたはずの日系社会の少数集団である沖縄系二世(翁長英雄や山城ジョゼ)と隠れキシリタンの末商を含む日系キリスト教徒(田村幸重、平田 進)でした。勝ち負けによる日系社会分裂をまとめていった日本文化協会設立の動きでは、とかく山本喜誉司ばかりが取り上げられますが、本当の立役者はこの人たちだと私は見えています。

これは抑圧された少数集団ほど、早く大量に外国へ移住するという傾向と深い関係があります。天災や戦争、貧困や飢饉、宗教的な迫害や人種差別などの旧世界の秩序に苦しんだ社会的な弱者ほど、世界の避難所としての新世界に飛び込んでいったと思います。つまり、旧社会のひずみが最も集中した人、強く押し出された人ほど、早く、多くブラジルへ渡ってきて、地歩を築いた。その結果、新大陸では旧世界の秩序がひっくりかえるという、世にも不思議なことが起きています。

かくして沖縄系は日系社会において大きな存在感を占めるようになりました。その結果、2008年の百年祭の時、日系御三家のうち2団体の会長が沖縄系だったのは象徴的です。この百年祭で何が起きたのかを理解するためには、その前の1990年代を理解することが必要です。私は「魔の90年代」と呼んでいます。1994年の南伯産組、コチア産組の相次ぐ解体、1998年の南銀の身売り。日系社会のインフラともいえる組織が次々に崩壊したのは、なぜでしょう。

「移民の団塊世代」の家長は1980年代には80歳、90年代には90歳となり、寿命を迎えたのです。団塊世代という「旧秩序」が消滅し、本当の意味で次の世代が始まったのが90年代でした。「魔の90年代」には百周年につながる萌芽があったのです。ずっと別々に移民祭を行ってきた沖縄系が、1998年の移民90周年から一般の移民祭にも参加するようになったと聞きました。その後、上原幸啓文協会長、与儀明雄県連会長が誕生していくのです。それまで独自路線を歩んできた沖縄系が、日系社会全体の動きと統合し、リーダーになっていった過程が90年代から動きではないでしょうか。

百年間の移動を追うと、「逆時計回りの西進」を描いています。「明治の日本」の行き着く先はパラナ州なのです。その結果、百周年前後からロンドリーナではグルッポ・サンセイ、クリチーバでも百周年を機に琉球国祭り太鼓が誕生、若葉太鼓などの若手芸能集団が力をつけており、今年はパラナ勢がYOSAKOIソーラン全伯大会の3位までを独占しました。グルッポ・サンセイの代表は城間ミチさん。沖縄系が中心になって「マツリダンス」

という新しい日系文化を生み出しました。つまり、沖縄系を軸とした日系全体のエスニックイメージの再編が起きていると私は見えています。

報告者④ バネッサ知念（ウチナープレス）

タイトル 「ブラジルの沖縄社会」

要旨

ブラジルは日本以外で大きな日本人コミュニティの1つを有する国です。150万人もの日本人やその子孫はもう6世代目になっています。この内、沖縄のコミュニティはブラジルの日系人口全体のたった10%であり、それは約15万人となります。

笠戸丸の船に乗って、最初の移民が来伯してから103年になりますが、日系コミュニティ、とりわけ沖縄のコミュニティは、今でもさまざまな日本の伝統や習慣をありのままに受け継いでいます。それは農業、調理、芸術に始まり、多岐に渡る一方で、自分たちのブラジル社会にも影響を与えているのです。漫画、空手、寿司、刺身、手巻き、折り紙。このような日本語から他の言葉までもが、ブラジル人の日常の一部をなしています。

日系コミュニティの中でも、沖縄県系人は団結し助け合う集団として傑出していると知られています。最初の移民がウチナーンチュ精神である「ゆいまーる」や「ちむぐくる」を一緒に携えて、この心を自分の子孫に伝えました。伝統、習慣、言語、芸術などは守られ続け、更にブラジルは、「昔のウチナー」としてみなされています。

戦前に多くの移民が到着したので、沖縄の言葉は守られており、今でも様々な地域的な種類のウチナーグチでの会話を聞く事ができるのは、サンパウロ州やマット・グロッソ州のような、主に多くのウチナーンチュが集まる場所となります。同じことが習慣や伝統の多くに見受けられ、戦後、日本でも起こったような、現代化や外部の影響には悩まなかったと言うことが出来ます。

習慣、言語、気候や異なった慣習を有する、遠くのある土地で、移民は財産を築く希望と夢を持ってきました。しかし、お金を稼いで、故郷に帰るという自分の夢を現実のものにする事は出来ませんでした。彼らはブラジルに移民し、苦悩や過酷な仕事、なけなしの報酬に喘ぎ、日本に戻るという夢を叶える事は出来なかったのです。それにも関わらず、開拓者たちは戦い、悩むことで、ブラジル社会の中でとても尊敬を集める社会を作りました。

開拓者から受け継いだものに、ブラジル沖縄県人会の創設があり、今年で85年を迎えます。ブラジル沖縄県人会は、沖縄県人の交流と相互扶助を目的とし、沖縄県と一緒に、沖縄県人の代理機関の役割も果たしています。

現在、ブラジル沖縄県人会はブラジルの各地に広がる44の支部を有し、ブラジル国内の日本の県人組織の中でも大きなものの1つとなっています。サンパウロ市内の16支部、サンパウロ州内の24支部、更にサンパウロ以外の4支部（マット・グロッソ・ド・スウ州カンポ・グランジに1つ、ブラジリア連邦区に1つ、パラナ州ロンドリーナとクリチバの2つ）。それらの支部は、三線、太鼓、舞踊の稽古に始まる、社会や文化、スポーツの活動を行い、あらゆる年齢層の人たちを惹きつけています。

注目に値する事実は、沖縄の文化に対する新しい世代（3世、4世、5世）の関心です。ここには沖縄文化に興味を持つ、ウチナーンチュの子孫ではない人たちも含まれており、空手、古武道、民謡、エイサーや琉球舞踊までも練習しています。それは4世の私にとって誇りに思える事です。なぜなら沖縄の豊かな文化は、言葉や国籍の壁をもともしない事を示してくれるからです。この意味で、非常に興味深く思うことは、たくさんの人たちが沖縄文化に慣れ親しんでいる事から、ウチナーンチュのアイデンティティは、沖縄にルーツがあるという事以上の何かであるという点です。

ブラジルでは、いろいろな分野で沖縄県系人でない人が、大学や大学院で、音楽、調理、人類学、文学、歴史、社会科学などの試験を受け、テーマとしての沖縄が扱われているという例があります。

一方では、何百人もの日系人の例があります。彼ら多くは、ブラジル社会で際立っているウチナーンチュで、様々な重要職を占め、国の発展の一助となっています。政治、教育、衛生から果ては経営まで、あらゆる業界にわたり、沖縄県系人の代表がいます。

21世紀への大きな心配事の1つは、日伯社会の中での日本文化の維持と保護です。サンパウロ人文科学研究所によって行われた調査による見積りでは、ブラジルに居住する日本人人口（日本人とその子孫）は150万に達し、その中の1世は13%、2世は31%、3世は41%（うち42%は混血）を示し、4世は13%を構成しますが、うち61%は混血であるという事です。

私たちは現在2つの正反対の状況にあります。以前から1番に言われているのは、自分の沖縄のルーツに興味を持ち、その文化や伝統を守る若い世代がいるという点に加え、沖縄県系人でない人たちも、沖縄に興味を抱いています。しかし他方では、日伯協会の衰退という気がかりな状況があり、それを維持しようという子孫の関心のなさがあります。様々な要因がこの状況に拍車を掛けています。ブラジル文化の同化、異種混交、移民の時とは反対の動きとして、何千もの日本人の子孫を彼らの先祖の土地へと送り込むデカセギ現象、要するに、いろいろな動機が子孫を協会から遠ざけるのです。

ブラジルの沖縄コミュニティもこの状況を心配しており、ひとたび時が過ぎ去れば、若い世代は先祖のいた沖縄県との連絡をしなくなるという傾向が、ますます現実のものとな



るでしょう。そのような事が起こらないように、若い世代と沖縄県との結びつきを維持する事が大切です。「世界のウチナーンチュ大会」は、世界中のウチナーンチュのアイデンティティを強化するのに最高の舞台です。

ブラジルには、現在行われている祭りがあり、沖縄フェスティバルと呼ばれています。ブラジルのウチナーンチュ・コミュニティの大きなイベントの1つとみなされ、たくさんの人たちを惹きつけています。ブラジル沖縄県人協会加盟の大きな支部である、ヴィラ・カハオンの沖縄協会によって開催され、沖縄フェスティバルは既に9回目を迎え、今年はイベントの2日間で参加者は3万人以上を数えました。

芸術の公演、格闘技、ヒージャー汁や沖縄そば、サーターアンダギーのような郷土料理が祭りの一部を構成し、観衆に紹介されるのは、ほとんどが子孫でない人たちによってなされる沖縄文化のあらゆる恵みです。この種のイベントは、広報やコミュニティ全体を統合する手段でもあります。

沖縄フェスティバルは日本フェスティバルに似ています。県連によって奨励されており、今年で存続14年を迎え、イベントの3日間で18万人を受け入れる日本フェスティバルはラテン・アメリカの大きな祭りの1つとみなされ、ブラジルの日本の47県人会全てを集めます。

沖縄をブラジルに繋げる2つの協定も見すごすことができません。1つ目は1978年に那覇市とサンパウロ州サン・ヴィセンチの間に結ばれた姉妹都市の協定、そして1986年に結ばれた沖縄県とマット・グロソ・ド・スウ州の姉妹都市の協定です。どちらも協定者間の文化、技術、教育の交流を促進し、沖縄とブラジルの友好と協調の絆を強くしています。

その他に、奨学金のプログラム（県費留学や研修留学）も存在し、そこでは若い子孫が先祖の故郷を知ったり、沖縄に住む親戚との家族的繋がりを強いものにしたという機会があります。ブラジルには、奨学生のOB会である、うりずん会があり、沖縄の文化の維持のため、座談会、会合、ワークショップから他の活動まで、積極的に活動しています。古典音楽、琉球民謡、琉球舞踊、エイサーというような沖縄の様々な芸能の先生方や師範の方も、将来の世代に沖縄文化を継承するために尽力されています。

ますますグローバル化する世界において、情報があらゆる人に行き渡る中、私たちのルーツやウチナーンチュ・アイデンティティについて見つめ直す必要があります。私たちの先祖から授かった遺産とは何か。次の世代に残すもの何か。「いちやりばちよーでー」という表現はどういう意味で、沖縄県人に知られているのか。戦争の苦悩が沖縄にもたらした教訓をどのように伝え、平和な文化に変えるのか。これらの目標を具体化する為に目を向けるべき様々な問題が存在します。

## 第2部 シンポジウム報告

前原信一（司会）：

前原でございます。ずっと海外のウチナーンチュの取材を25年ぐらいやっております、今日は日系新聞の皆さんが集まるということで、私も非常に聞きたいこともたくさんあります。また、会場の方から色々な質問が出ておりますので、そういう質問に答えていただく。それで、1人当たり30秒で答えていただく。そうしないと皆さんの質問に答えられませんので、よろしくお願いします。

会場から（質問が）来ております。深沢さんのお話の中でブラジルの場合、ウチナーンチュってというのは（日系人の）10%しかいないんですよね。それで10%の沖縄系の人たちが日系社会全体の動きと統合してリーダーになっていくと。やはりこれは90年代からの動きではないかというふうにおっしゃっていますが、なぜそれだけウチナーンチュの人たちが他府県の人たち、数の多い人たち以上にそういうリーダーになっていったのか。そのあたり会場から質問がきております。

深沢正雪（ニッケイ新聞）：

ひとつはやっぱり一般の日本移民より10年、15年ぐらいですか、早く団塊の世代というのがつくられて…。戦前の方は、沖縄の方でも日本移民一般の方でも基本的には9割がたは出稼ぎ移民、帰ろうというものであったのですけれども、でもごく一部、やっぱり永住志向の方っていうのがいらっしゃって。特にやはり先に来た方のほうがそういうものに対しては経験とやはり強い意志を持って子どもを育てていたと。そのへんが戦争中の経験を経て、戦後大きな方向性として認識派の動きに収斂されていくと。ブラジル日本文化協会創立に行くわけですけども、その時に一般的に山本喜誉司という人が非常にクローズアップされるのですけれども、実際の動きの中でやはり沖縄県の方たちが果たした役割っていうのはかなり大きかったと僕は思います。

あと、戦後、日本移民全体で5万人（ブラジルに）入ったといいますが、沖縄の方だけだと5千人以上入っているんですね。戦後移民のやはり半分は日本に帰ったと言われてまして。ですから実数としては2万5,000人。その中で沖縄の方が帰国した率はそれ以外よりも低いんじゃないかといわれていて。そうすると（沖縄系の）割合はかなり大きくなって、戦後にまた第二の団塊世代といえるものをつくったんじゃないかと思うんです。その人たちが90年代にピークを迎えたというような気がします。そこでやはり90年からまたひとつの大きな別の動きといえますか、一般の日系社会は90年代にかなり勢いが衰

えていくわけですがけれども、逆にそこから台頭してその勢いによって日系社会全体が再編していったと。その中でやっぱり全体として更にクローズアップされるようになってきたのかなという印象があります。

前原（司会）：

ありがとうございます。

仲嶺さんのお話の中で、かつてハワイには内地対沖縄という対立があって、仲嶺さんはコンフリクトと言っておられますよね。で、現在はハワイの日系人というと広島、山口、熊本というのはかつて多かったわけですよね。その中でなぜ日系社会の中に沖縄の人たちがどんどん入っていく。それはかつての内地対沖縄という対立を乗り越えて、沖縄の人たちが力をつけていきたくてということなんですかね。どういうかたちでやっぱり日系社会の中に沖縄の人たちが入っていったのか。要するに、かつて沖縄は差別されて、内地の人たちから差別されて偏見を抱かれる存在だったわけでしょう。後から来た日本人でしたから。今は沖縄フェスティバルを開いたり、沖縄センターをオープンしたり、日系人の中でもある意味では脚光を浴びる存在になっているわけですね。この背景ってというのはどういうふうにはハワイの中で見ているんですか。日系社会全体の中から沖縄の人たちをどういうふうに見ていますか。

仲嶺和男（ハワイパシフィックプレス）：

う～ん、難しい問題ですけど。例えば先ほども私申し上げましたがけれども、日本人商工会議所の中に沖縄県三世四世の会員が非常に少ない。それでいてWUBという組織がありますね。Worldwide Uchinanchu Business Association。日本人商工会議所入らないで、そういうの作ったという。あるいはもうひとつ申し上げたように日本人婦人会、日系婦人会の中に沖縄県の二世はほとんどいません、前は2、3人いましたけれども。三世なんていないんですね。

前原（司会）：

それは沖縄の人の中にやはりその日本人の組織の中に入りたくないという…。

仲嶺：

それはあるかもしれない。uncomfortableかもしれない。しかし沖縄出身者だけの団体はあるわけですよ。フィオラウリマという婦人会が。それにしても（日本人組織に入るのが）少ないというのは私はひとつのやはり何か割り切れない気持ちを持っているんじゃない

いか。あるいはおっしゃるように過去に差別があったからなのか。私はそうじゃなくて、やはり二世三世の段階において今日私が強調した倫理観の問題が二世三世にもあるんじゃないかと。それが尾をひいているというような私の結論であります。

前原（司会）：

uncomfortableというそういう無意識がある意味では気持ちの問題にもあるわけですね。

また別の質問がきておりますので。出稼ぎということが特に南米ではありますけれども、ヴァネッサさん、1990年に日本の移民の法(入管法)が変わってどんどんブラジルからも(日本に)行きました。今、日系人がブラジルから30万人くらい日本にいると思いますけど、ブラジルに戻った人もいますよね。日本に行って、ブラジルに戻ってきた人たちの気持ちって何か変化がありますか。たとえば、よく親は二世が(日本へ)行く場合、日本の人は勤勉で真面目で、そして礼儀を守るといふ、昔の日本のスタイルを親は伝えるわけですよ。そしてあなたも日本に行ったらその日本人の良さを身に付けなさいと送り出す。しかし実際に行ってみると、親が言った日本人像と今の日本人は全然違う！とショックを受ける。というような話を聞くんですけど、どうなんですか、そのあたりは。

ヴァネッサ城間知念（ウチナープレス）（通訳を介して）：

（親が言っていた日本人観と全然違うといういことは）ないと思います。

前原（司会）：

さっき大宅壮一さんの話がありましたね。明治・大正の日本を見なければ南米に来なさいという話がありました。沖縄でも「沖縄の心を知りたいなら南米に行きなさい」ということわざがあるわけですね。要するにウチナーンチュの気持ちなんかを持っている人たちは南米に多いということなんです。つまり我々が、沖縄が本来持っていた心を失いつつあるものですから、逆に南米の人たちはそれを守っているということがあって、そういうことわざがあるわけですね。ですから我々沖縄の人がよく南米に旅行して非常に感心するのは、そこにはやっぱり昔の沖縄の人の気持ちとか温かさとか優しさが非常に残っているんですね。ところが逆に我々は急速に沖縄のそれを失っているんじゃないかと。そういうギャップがあるんですけども、そのあたりは皆さんから一言ずつ、今の沖縄の人たちの気持ちの変化、精神の変化をちょっとお話していただきたい。

ヴァネッサ：

ブラジルではまだ沖縄、ウチナーンチュの精神は残っています。ブラジルにいるウチナー

ンチュが沖縄に来ると二世の人でもふるさとに帰ってきたような気持ちになります。

前原（司会）：

まだそんなに違和感は無いですね。

ヴァネッサ：

沖縄と本土の違いはあります。

前原（司会）：

ありがとうございました。

そのあたり崎原さんはどうでしょうか。アルゼンチンの沖縄コミュニティと実際に沖縄に来てみてですね、我々と接すると違和感みたいなものはありませんか。

崎原朝一（らぶらた報知）：

いや、ほとんど無いような感じです。例えば出稼ぎでも本土中心に働いている人たちが沖縄に帰った場合、なんかホッとするという意見が多いみたいですね。

前原（司会）：

要するに本土で働いているところよりも沖縄を訪ねるとホッとする？

崎原：

沖縄のほうが（本土より）緩やかかっていうか…。いわゆるアルゼンチンで知っている周りの人たちの雰囲気を持っている人たちに出会うっていう感じじゃないですか。

前原（司会）：

深沢さんはそのあたりは他府県出身者でいらっしゃるんですけども、ブラジルの日系社会の中において、沖縄県人、沖縄出身者、沖縄系の人をどういうふうに見ておられますか。

深沢：

やっぱりこの世界のウチナンチュ大会自身が他の県ではこれほどの規模では有り得ないわけですし。今回の大会で色々な方からお話を伺っていくなかで印象的なのが、元々三世世代っていうのが僕はすごく大事だっていうか。二世の世代の方っていうのはやっぱり良くも悪くも非常に親の話を直に聞いて、親に近い感情をといますか、祖国や自分のふ

るさと、親の本国への気持ちを持ちやすいというか。今、三世世代が段々増え始めてきて、ヴァネッサさんも四世ですよ？三世の世代になって初めて客観的に愛憎の感情を超えた祖国への気持ちっていうのが芽生えてくるっていうひとつの傾向があるような気がするんですよ。今、この第5回ウチナーンチュ大会がそういう段階になってきているのかなと。与儀さん（ブラジル県人会長）とかの話をお聞きしても、第3回大会までは一世が非常に多かったと。それが第4回あたりから段々二世三世の方が増え始めて、今回ははるかに一世の方が少ないと。それでもこれだけ人数が増えているという話を聞いて。

また、ジョージ・オクバルさんっていう、ブラジルの大きな新聞の論説員をやっておられる沖縄系の方がいらっしゃるんですけど、その方が今回（ウチナーンチュ大会に）初めて来られましてね。昨日感想をお聞きしたら、昨日のパレードの時に道端からお帰りなさいと言われて。（ジョージさんは）あまり日本語上手じゃない方なんですけれど、普段は日本語しゃべらないで生活している方ですし。でも小さい頃ウチナーグチでお母さんに育てられたという家庭環境の中で、つい沿道でお帰りなさいと言ってくれた人に話しかけたら、「あなたは自分が使っていないようなウチナーグチを使われている」と言って大変喜ばれたと言っていました。その現場を彼の息子が見ているわけですよ。ジョージさんの世代っていうのはウチナーの方と本土の方とコンフリクトがまだ強い世代なんです。で、日本語は覚えなかった。ただども子どもの世代になると、それはもう完全に超えていると言って、非常に喜んでらして。やっぱり今回の大会に連れて来て良かった、と言っておられたことが印象的ですね。そのハードルを世代を超える段階にきているんだな、と非常に感じました。

前原（司会）：

そういう意味では明るい次世代が育ってきているということですね、ウチナーコミュニティの中にも。

崎原さん、アルゼンチンの場合はまだ県人会も一世の人たちが中心ですよ、会長さんとか。こういう新しい世代の台頭はウチナーコミュニティの中にも出始めていますか。

崎原：

いや、もちろん中心になっているのは一世ですけども、二世世代っていうのもかなり理事会の中に入っていますし、活動の中に入っています。更に三世世代が入ってきていますね。で、今、深沢さんが指摘されたように三世世代がもっと親近性を持っているということは、結局一世と二世は直接家庭の中で接しているから反発する面があるんですね。それを、おじいさんと孫が話がよく合うように、一世世代と三世世代はその辺で上手く合う



んじゃないんですか。それと最近例えば、(沖縄系の) 老人宿泊福祉施設ができて、そのチャリティーショーを開いているわけですよ。それをやったのが大体三世世代が中心で。例えば「命どう宝」ということをタイトルにして番組を組んでいるんですね。その中心になったのが、沖縄にHYという音楽グループがありますよね。その人たちの人気番組の「時を越え」というものを彼らがやっているわけですよ。しかも内容を正確にキャッチしたうえで、それをみんなの前で披露しているから、僕らや一世なんかビックリしたわけなんですよ。そういう感じが起ってきているなっていう感じがしますね。

前原(司会):

沖縄の持っている伝統芸能とかそういう音楽、歌、三線というのは、一世の人たちが移民地に持ち込んできたわけですよ。ただ、言葉が分からなかったり、踊りが分からなかったり、古典音楽が分からなかったりして、なかなか入らなかった部分があった。ただ、エイサーとか、そういうものによって若い人たちが入ってくるというのは、このところ90年代から沖縄のエイサーが移民地で盛んになりましたよね。このあたりもひとつ、やっぱりこれまで沖縄の音楽に馴染めなかった世代というのがエイサーというリズム感、ビート感を持ったものに惹かれて入っていた。それはひとつのツールとして、良い材料になっているんですかね。

崎原:

確かにそうですね。そのへんは県費留学生、あるいは市町村単位の研修制度がありますね。それによって沖縄に直接接することができる世代が増えているということ。それから出稼ぎが出ていますし、その人たちとアルゼンチンにいる家族あるいは友人たちとの接触が非常に体感的に、体感温度っていうんですか、非常に温度を身近で感じる機会が多くなっていると感じますね。それと太鼓グループが入ってきて、リズムの中に溶け込むことで、アイデンティティに似た感じをキャッチしているところはあると思いますね。

前原(司会):

ありがとうございます。

仲嶺さん、ハワイの場合はさっきの世代の話がありましたけれども、一世が教育を受けて、二世がAmerican citizenになろうという傾向が、三世四世から自分のルーツに目覚めるという、これは今日いらしている白水(繁彦)先生がお書きになった本の中に「ウチナンチュムーブメント」、60年代70年代からそういう沖縄のルーツに目覚める三世四世が出てきたと言っていますが、今の県人会のパワーというのはやっぱりそういう三世四

世が担っているのでしょうか。

仲嶺：

そうですね、はい。今、流行りのいわゆるアイデンティティに目覚めたということではないでしょうか。

前原（司会）：

それは他府県の場合、例えば広島、山口の人に比べてどうなのでしょう。

仲嶺：

他府県の場合は目立たないけれども、やはりそれなりに日本文化に対する関心は強いでしょう。ただ、日系人の場合はですね。いわゆる戦前、日系人は日本に味方しているんだって、日米が戦争をしたら日本に味方するんだって（ハワイ社会で）恐れられたわけですけど、それをイメージしたのか「演歌は唄うべきではない」ということがありましたけれども。やはりそういう恐れを気にしているのか、（二世までは）あまり日本に対する表だいた意見を述べないような感じがしますね。でもやはり日本の文化に対してはかなり関心があるようで、例えば桜祭りというものを三世四世が牛耳っていますし、それを見てもおっしゃるとおり……。

前原（司会）：

やはり二世よりも三世四世の方がそのような気持ちが強いですか。まあ、二世っていても80歳、90歳なられているわけですよね、ハワイの場合は。

はい、ありがとうございました。ちょっとまた別の質問も来ております。言葉の問題で、日系紙の場合、やはり日本人を中心に情報を出していた媒体ですけども、日本語を読める人たちが減ってきたというなかで、日本語の部分が減ってくると思いますが、日系紙の将来というのはどのようにお考えですか。まずはブラジルの深沢さんからお伺いいたします。

深沢：

ブラジルの日本国籍者の人口というのは6万人を切りました。日刊の報知紙というのが2紙あるわけなんですけど、13年前までは3紙ありました。大体、今の状態ですと年々一世の方は人口の5%ずつ亡くなっていますね。ですからその分だけ読者が無くなっていくと。毎日、それこそ10軒以上「パイパイが亡くなったので新聞を停めてくれ」という

電話が会社に来る状態ですね。

で、我々としては、じゃあどうすべきなのかということは日々考えるんですけど、ひとつは…私レベルの人間が言うことなんで、経営者レベルが言うこととはまた別のことだとは思いますが…、おそらく一世の方と報知紙は運命を共にするべきなんだろうと。役割を終えたらそれで十分やることやったんだと、胸を張って閉めてもいいんじゃないかというののひとつ思います。

もうひとつは具体的な生き残り戦略というものを考えなくてはいけないわけで。その中で、ポルトガル語で出している記事のページを独立させて、週1で12ページだてのですね、Journal Nippaku というものを作り、ひとつの新聞として購読契約ができるようにしたと。それによってパパイが亡くなったから新聞の契約をやめてくれ、という電話が大体娘さんから来るんですけども、それだったらポルトガルの新聞もあるから良かったらそれを読んでくれないかという形で、それを流通させるという、ちょっとずつでも購読が増えていけばと。それに応じた将来はあるかもしれないな、という思いでやっています。

前原（司会）：

崎原さん、アルゼンチンの場合はラプラタ報知だけですか、日系紙としては。

崎原：

そうですね。さっき言いましたように、亜国日報（の廃刊）というのが出稼ぎの影響を受けて、いわゆる新聞社で働くよりは出稼ぎの方がずっと給料が多いということで、それがひとつの原因だったわけで。

で、今、日本語が分かるっていうか、一世世代というのは全体の10%ですからおそらく限られた命だとは思いますが。だけれど、日本語新聞が1週間に2回火曜日と木曜日に発行、スペイン語が木曜日に1回だけ発行ですね。スペイン語世代が多くなっているにもかかわらず、ラプラタ報知という日本のタイトルをもった新聞で生きているような感じですね。

で、これからいわゆる日本語による新聞が消えて無くなると、どういう形で続けていくことができるのか。今ターゲットにしているのは70歳以上、60歳以上の二世世代と、それから若い小さい子どもたちの運動会とか色んな動きがありますからその人たちの親である20代後半から30代にかけた世代をターゲットにした紙面づくりといったものがあるわけですね。

で、これからどうなっていくのか。ある面では例えば、向こうのスペイン語新聞でもいわゆる現地、アルゼンチンの新聞ですね、アルゼンチン人の新聞でも日本とかアジアの

ニュースとなると、どうしても北米経由あるいはヨーロッパ経由になりますから、それよりも直接日本の新聞あるいはアジアの新聞から直接スペイン語の新聞に訳してアルゼンチンの大手紙とか週刊誌に売る仕事ができるんじゃないかと。あるいはその逆に、アルゼンチンやラテンアメリカのニュースを日本語化して、日本のマスコミに売ることができるんじゃないかという考えもあります。けれどもそうになると、当然スタッフも増やさなければいけないし、資本がかかる仕事ですから、そこまで踏ん切るのはまだできないという感じですよ。

前原（司会）：

仲嶺さん、パシフィックプレスは仲嶺さんが沖縄から行って始めた新聞ですよ。これは将来どういうふうに仲嶺さんは考えてらっしゃるんですか。

仲嶺さん：

もう34年になりました。8月に34周年記念を出しました。ちょうど同じ頃、34年、35年前に似たような新聞と雑誌がありました。ハワイパシフィックプレスを入れて3社ありましたけれども、1社は2年前に廃刊になり、1社は今年になって廃刊になりました。現在あるのはハワイパシフィックプレス、日刊のハワイ報知と、フリーなんです。日刊サン、そして広告新聞、広告雑誌ですが月2回発行しているタダの新聞があります。

新聞としては日本のニュースを伝えるメディアの仕事というものは、コンピュータなどの発達によってもうかなり必要にならなくなりつつありますが、地元の人たちのことを知らせるといってまだやはり必要ですね。先ほど申しましたように、アメリカへの移住を希望している日本人はたくさんいます。そしてその中から毎年300人から400人当選してアメリカに来ていますが、その中のほとんどが最初ハワイにしばらく住んで、米本土に渡っていく人が多いようで、そういう人たちはハワイの生活になれるまでは英語不十分な人が多いから、そういう人たちに対する生活の手引きみたいな情報誌が必要だと思えますね。

前原（司会）：

ハワイの場合はまだまだ…。国際結婚の人たちもいるし、日本語を読める人たちの層っていうのがあるわけですね。そういう意味では…。

仲嶺さん：

ただ、経費の問題がありますから。上手くコンピュータを活用して。私の場合つい5

月までは手で作っていました。各ページの原版は手作業でやりましたが、コンピュータに変えたらかなり経費が節約できるようになりました。非常に簡単に新聞が作れるようになりつつありますので、将来それほど厳しくないような気がします。作り方によっては、

前原（司会）：

ヴァネッサさんのところは最初からポルトガル語で全部出しているんですね。しかもウチナーコミュニティに向けての新聞ですか。

ヴァネッサ：

はい、そうです。ウチナープレスは元々、沖縄コミュニティの社会のニュースを伝える手段として生まれました。ウチナープレスの読者は今、一世は10%ぐらいで。これからもポルトガル語の予定です。部数は月4,000部。

前原（司会）：

これは伸びているんですか。

ヴァネッサ：

はい。

前原（司会）：

じゃあそれを読む層が段々増えてきているんですね。分かりました。

さて、今回のウチナーンチュ大会。大会のテーマが「ウチナーンチュのアイデンティティをつないでいく」という、沖縄の文化をつなげよう、そして自分たちのアイデンティティを高めていこうというテーマなんですけれど。

沖縄がホームランドとよく言われますけれど、皆さんから見て沖縄はどういうふうにあってほしいとお考えでしょうか。これも短くお願いいたします。それではこれはウチナーンチュである方に伺いしましょうかね、では崎原さんから。

崎原さん：

今から二十日ぐらい前になりますか。大工哲弘さんという八重山の民謡の大家がおられますよね。来て、その人の奥さんと本土の方の津軽三味線の専門家が来られた時のことですけど。例えば安里屋ユンタっていう非常に人気のある沖縄の民謡があります。これ個人的にですけど、僕は嫌いなんですよ。っていうのはなんかこう、媚びているようなところ

があつて。ただ、大工哲弘さんが南米訪問されたとき、オリジナルの安里屋ユンタを唄われた時、非常に好きになりましたね、内容的に。そういうふうに例えば、今沖縄を中心にした絆っていう場合、いわゆる「ゆいまーる精神」とか「いちゃりばちよーでー精神」とかいうことが随分言われておりますけれど。確かにそれは強い強硬な、今までの沖縄県人の強い特質は、感情とか情感に結び付いたもので、非常にそういうものがありますけれど。当然それを絆にしなければならないんだけど、それと何か離れた質的なものを付加価値として付けなければいけないんじゃないかな。「いちゃりばちよーでー」とか「ゆいまーる精神」は、それは絶対否定できない要素ですけど、それに付け加える何か付加価値をこれから探していかなければならないんじゃないかなって感じですね。

前原（司会）：

ヴァネッサさんはどういうふうに沖縄を見ていらっしゃいますか。

ヴァネッサ：

崎原さんと同じように、私もウチナーンチュのゆいまーる精神が続いてほしいです。なぜかという、沖縄系の人だけでなく、他府県の人たちもこのウチナーンチュの精神を尊敬しているからです。

前原（司会）：

はい、ありがとうございます。

そのあたりは唯一の他府県出身者で。深沢さんはウチナーンチュ大会の開会式にもお出になられて、すでにこの5年に一回の熱狂的なウチナーの雰囲気はご存じなんですけれど、どのようにご覧になられていますか、今回で2度目だそうなんですけれど。

深沢：

大会に参加するのは初めてです。前回は大会の前に来まして、大会の時にはいなかったものですから。

前々から県人の方から話を聞いて、非常に来てみたかった大会だったので。昨日の開会式と前夜祭のパレードは非常にある意味想像通りだったというか、想像以上のものを感じましたね。非常にやっぱり文化の強さとともに、血のつながりの強さといえますか。

あと、移住というひとつのパターンの中で、僕がよく思うんですけど。何がどう伝わるのかというところで、態度とか人格っていうのと、言葉と文化っていうのを別々に考えた方が良いと思うんですね。で、家庭の中で伝わっていくのは人格的なものであるも



のとか態度。で、外の学校とかブラジルの場合はブラジルの一般社会ですよ、そこで伝わっていくのは言葉であるとか、文化であると。その態度の部分とか気持ちの部分、人格的な部分っていうのが共通していれば、おそらくこういう大会に参加した時に、言葉は違っていても共感し合える部分が非常にあるんだと。だから日本語ができない世代っていうのが今回ブラジルからかなり来ていますけれども、彼らがそこで求めているものは、やはり親から受け継いだ共通の態度とといいますかね、気持ちとといいますか、それがちょっとでも感じられれば来た甲斐があるというか、自分のルーツを求める意識に応えてもらったというようなものを感じる、共感する場になる。昨日のまさに開会式の様子というのは言葉を超えてですね、そういう親から受け継いだ態度とか気持ちというのがあの会場一体で共感された。それによる高揚感とといいますかね、ある意味よそ者からすればもう宗教的なものと言ってもいいぐらいの感じがして。これはすごいなと本当に思いました。

前原（司会）：

どうもありがとうございました。

会場からの質問も来ております。どうぞ、どなたでしょうか。

会場からの質問者：

ついさっきまでですね、コンベンションセンターで若い人たちの次世代のための会に出ている、そこでブラジル系の方が「私は日本人ではない。ウチナーンチュである。」ということを言われました。私、ハワイに30年近くずっと（研究などで）通っていますが、最近若い四世の方々が同じようなことをおっしゃいます、チラッとこの間沖縄タイムスに書きましたけれども、で、先ほどハワイ、ブラジルでも90年代に日系社会のリーダーを沖縄の人、沖縄系の人を務めるようになったと。そういう日系社会の統合とかインテグレーションに力を貸すという沖縄系の人がいる一方で、しかし次の世代の方々は「私は日本ではない。沖縄系である。」というような、一見ちょっと矛盾するような方向性があるように見えるんですが、そのようなあたりをどのように考えればいいのか、というのを教えていただきたい。

前原（司会）：

これはブラジルの方でよろしいですか。では、深沢さん。

深沢：

明確な理屈というものは何もないんですけれども、なんとなく思うんですけれども、一

般の日系社会っていうのは基本的にはどんどん求心力を失っていると思うんですよね。エスニックアイデンティティと申しますか、日本人としてのアイデンティティというのは基本的にはどんどん薄まってきているという流れのなかで、やはり沖縄系の人たちというのはまだ強いものを残している。そして、結果的にその存在が浮かび上がってくるというか。日系コミュニティーのなかで、段々一世の世代が終わって、どこの団体も二世が中心になってくると、やはりその一世時代にあったような内気な要素（アイデンティティ）が本土（系）の人にはすごく薄れてきて、今ほとんど無いと言っていいような状態になったからこそ、日系御三家の2団体がですね、沖縄系の方が（長に）なったという状態になってきている。むしろだから一般日系社会のなかで、そういう強いエスニック意識も持った人を求めている。そういう人にリーダーになってほしいという意味で、さらに加速しているというか。だから沖縄の人はそういうエスニック意識を強めていることは日系社会においてはむしろプラスに作用するというか。そういう核が無いと本当にもっと早く求心力は弱まってしまうのかなど。だからパラナのほうへ動いていった明治の精神を持った世代と、サンパウロを中心とした沖縄の子孫の方のこのふたつっていうのが、今後50年の両輪になっていく可能性があるのかな、というような印象を持っています。

前原（司会）：

ありがとうございました。

まだまだ伺いたいこともあるし、会場からも質問したいと思えますけれども、このあたりで閉めていきたいと思えます。

私、実はハワイの百周年のときに取材に参りまして、そのなかで最後にアルバート宮里先生がおっしゃった言葉が非常に今でも印象に残っております。3つの簡単な日本語で話されました。「忘れるな、受け継げ、伝えろ。」やはりこれが移民社会の皆さんのひとつのモットーでもあるし、我々も、移民を送り出した沖縄としてもやっぱり「忘れるな、受け継げ、伝えろ」と、そういう初期移民の人たちからの移民史をしっかりと伝えていく。そうしたなかでのウチナンチュのアイデンティティとか絆の深さとかそれらを高めていく。原点はそこにあるんじゃないかなというふうに思いました。

これからあとまだまだウチナンチュ大会も閉会式までありますので、今日ご参加の皆さまと一緒に我々もそういう参加をしながらですね、今日の話をもとに、また考えていきたいと思えます。遠路わざわざ今日のフォーラムにお越しいただき、誠にありがとうございました。＜終＞